

氏名	い どんがん 李 東冠
学位の種類	博士（文学）
報告番号	乙第1782号
学位授与の日付	令和1年10月3日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当（論文博士）
学位論文題目	鉄製農工具からみた日韓交渉
論文審査委員	(主査) 福岡大学 教授 武末 純一 (副査) 福岡大学 教授 森 茂暁 福岡大学 教授 桃崎 祐輔 九州大学大学院 准教授 田尻 義了

内容の要旨

まず、韓半島の南部地域を対象に初期鉄器・原三国時代の鉄器文化の様相について触れてきた。

また、タビをはじめとする鉄器の組合せと構成、土器の変化様相との関係を考慮して時間軸を設定することにより、東南部地域における初現期の鉄器構成の実体が月城洞類型であることを指摘した。

さらに月城洞類形Ⅰ段階からⅡa段階への中に鉄器組合や構成に急激な変動があることを確認することによって、紀元前1世紀頃、東南部地域の鉄器文化に第1画期があるとみて、このような画期は東南部地域に限られたものではなく、西南部地域や中部地域の鉄器文化の衰退と連動した現象であることを明確にした。

これまでの研究から、東南部地域の初現期鉄器文化の実体を捉えるに当たって、我々の目を覆ってきたのは、本研究における偏平片刃石斧及び板状鉄斧を同じ様式と認識し、連続線上で把握する根深い一般論と、月城洞類型に対する明確な認識の不在であったことを本研究の検討から証明した。

また、礼山里1号から出土したのと同じ鑄造鉄斧c類の起源が楽浪地域にあることも証明した。これが2世紀後半から中部地方に波及し、時間の流れによって次第に変容・定着することを型式学的に検証した。

さらに、これを基にして靉島鉄器の様相を検討した。靉島から多量に出土した弥生土器の代わりに、倭が靉島から輸入した物品が何かについて議論が続いてきたが、主に韓半島の鉄ということで意見がまとまっている(李昌熙 2011、2015)。靉島の送风管、炉壁片、鉄滓など鉄器生産関連の遺物が出土していることから、靉島から鉄器生産が行われたことは確実である。Ⅰ段階まで慶北地域に集中していた月城洞類型鉄器が、靉島でも同じよう

に現れており、一連の製鉄関連作業も行われていたことを確認した。したがって、この時期の東南部地域の鉄器の外部搬出において、靺鞨が一定の役割を担っていたものとみられる。そして、Ⅱa 段階以降の靺鞨に比べて高いレベルの鉄器や製作技術を備えているにもかかわらず、それらの搬出が政治体によって徹底的に統制されていたはかの東南部地域とは異なり、交易・交流の自律性が保障される「対人社会」であった靺鞨はこの時期にはじめて最も盛んな活動を行うことができたと考えられる。ところが、須久Ⅱ式以降、弥生土器が急減することからみると、靺鞨の全盛期は紀元後 1 世紀を基点に終了するが、これに対する詳しい検討は今後の課題としたい。

さらに、本研究で検討は韓半島東南部地域の初現期の鉄器様相の解明にとどまっている。原三国時代の全般にわたる検討がなされず、残念ながら嶺南式の単刃タビ 16) が出土するなど、嶺南との連結の輪になり得る忠州金陵洞遺跡についての議論を進展させることができなかった。以上、残された課題については、今後中部地域のまた別の鉄器遺物とともに検討したい。

一方、これまで断片的に指摘されてきた韓半島南部地域のタビをはじめ、各種農具の形式を民俗資料との比較を通じて明確にし、その時・空間的な展開過程をとりまとめた。

具体的には、韓半島の古代タビを錐形、杓子形、嶺南式単刃タビに大分類し、錐形と杓子形は再度、片刃と両刃として細分化し、民俗資料との比較・検討を通じて鉄鑿、鑄造鉄斧、扇形鉄斧などがこれに当ることが分かった。また、これまで起耕具として知られてきた嶺南式単刃タビの場合、その形の力学的な観点と在来タビのうち、このような形が見えないことに着目し、インゴリとしての機能と用途を与えた。そして、韓半島南部という広い地域的な範囲からすると、本研究から設定した各形態の展開過程が中国の犁登場過程と類似しているという点を明らかにした。本研究で設定したタビの形式と機能・用途の妥当性を証明した。

さらに、古代のサルポの形とその特徴から型式分類し、展開過程について整理を行った。また、鑄造鉄斧、板状鉄斧、三叉桑、鉄鎌、鋤先など韓半島南部から出土する鉄製農具全般の機能・用途、変遷様相を検討し、これをもとに類型化して各タイプの特性について触れた。

また、梯形鑄造鉄斧を中心に農工具の機能と鉄器補助材の用途が併用されたことを認知し、このような機能と用途が時間の経過によって漸進的に変化したと説明した。そして、楽浪郡設置以降、嶺南地域に登場する鑄造鉄斧を第 1 画期に設定し、浸炭製鋼技法の出現とみた。さらに、この時期に出土する鑄造鉄斧は、農工具的用途を強く反映していることから、鉄器製作補助的な用途を即物的に反映するのではないことを証明した。ひいては、中間素材である鉄鋌系板状鉄斧が登場し、鑄造鉄斧がより長くなり、袋部に切削痕が現れ、鑄造鉄斧の破片が価値手段として古墳に副葬され始める時点を第 2 画期と設定した。この時期の特徴は鑄造鉄斧が浸炭製鋼のため、鉄器製作補助材的な用途として使われ、中間素材と共に本格的に流通し始めたのである。第 2 画期と連動して百濟地域のみ鑄造鉄斧が生産され始める。鉄矛・鉄鏃などの新たな鉄器群が登場する背景には、従来の加平大成里

型の脱炭製鋼技法の代わりに導入された浸炭製鋼技法の登場があったことを説明した。

本研究は限られた資料のため、試論的な性格が強い。それにもかかわらず、最も大きい成果として評価したいのは、鑄造鉄斧の機能・用途に対する新たな接近である鑄造鉄器が鉄素材的な用途として使われたという従来の研究傾向に対して脱炭ではなく、浸炭による製鋼という新たな意見を具体化させたという点に意義があると思う。今後、百濟地域の 造鉄斧の具体的な変遷様相と浸炭製鋼技法の起源問題が解決されれば、より事実に基づいた解釈が可能であろう。

また、鑄造鉄斧と鉄挺、鍛冶具という組み合わせは、意味するところが具体化されたことにも意義があると思う。近年、再照明された皇南大塚には、大量の鉄器類や鉄器製作素材である鉄挺、鑄造鉄斧とともに大型やっこなどの鍛冶具が出土した。低炭素鋼である鉄とこれを浸炭させて高炭素鋼を作るための鉄器製作補助材である鑄造鉄斧、被葬者の権威を窺える大型鍛冶具の組み合わせは、当時、皇南大塚の被葬者が鉄器製作と流通の最頂点にあったことを示す。したがって、皇南大塚に副葬された鉄器類から類推できるこのような問題はこれからの課題としたい。

以上の研究を踏まえ、第3章では、韓半島と日本列島の鉄製農工具の交渉様相について究明した。

九州地域の5世紀前半では先述した新羅系の蕨手刀子、U字型鋤先、曲刃鎌などが多数搬入され、急速なスピードで在地化し始める。また、九州地域ではないが、新羅地域産とみられるタビが出雲地域に搬入された例も知られている(李東冠 2011)。サルポの場合6世紀以降、百濟系のものが九州地域に一部の搬入される様相がみられる。

以上の鉄製農工具の交渉様相がより具体的で明確に表出する例が、初期の沖ノ島祭祀遺跡である。沖ノ島遺跡は、韓半島と九州の交通要衝地に位置する小さな島であり、島全体が岩上祭祀の形態から段階的に露天祭祀へと変化し、持続的な祭祀が行われることで知られている有名な遺跡である。そして多数の韓半島系遺物が共伴出土し、日韓交渉の様相の一端を復元するのに非常に有効であるといえよう。その初期の岩上遺跡に該当するものが16~19号、21号であり、本研究ではこの初期の岩上祭祀遺跡から出土された遺物を対象に日韓交渉の様相と年代問題について説明したい。

まず、岩上祭祀の開始年代問題である。沖ノ島の岩上祭祀の開始年代は大和政権が4世紀後半、韓半島の三国の抗争に深く介入し、沖ノ島祭祀にも関与して国家型祭祀に昇格されており、これを初期祭祀の出現の背景と見るのが一般的である。つまり、韓半島への出兵に伴う祭祀の形として考えられており、これは九州での畿内勢力の登場時点など様々な問題が絡み合っている。初期祭祀遺跡では沖ノ島の特殊な蕨手刀子が出土されており、18号→沖ノ島Ⅰ型(16号、17号)→沖ノ島Ⅱ型(21号)に変化するという点は既に説明した。21号の年代がほかの遺跡に比べて新しいということは定説化されたことであるが、問題は16~18号の年代である。蕨手刀子からみると18号の蕨手刀子が16・17号に先行することは間違いなく、18号の蕨手刀子の上限年代はその型式上、老司古墳出土の蕨手刀子を遡り難い。

また、後出する 21 号、8 号などでは典型的な大伽倻系の模型鉄器が出土する 5)。このように蕨手刀子と代表される新羅系の遺物、以降大伽倻系の遺物との交渉の結果物が時間によって出土されているのに対して、4 世紀後半、日本列島と最も密接な関係のある金官伽倻系の遺物は岩上祭祀遺跡では全く見当たらない。

つまり、5 世紀初の老司古墳の上限年代が与えられる新羅系の蕨手刀子から大伽倻系の模型鉄器につながる日韓交渉の様相が鮮明に現れる沖ノ島祭祀遺跡から金官伽倻系の遺物の不在が示唆するところは大きいと言えるものであり、従って岩上祭祀の開始年代についても、日韓交渉の側面から再検討する必要がある。

一方、日韓の本格的な交流関係は弥生後半期、すでに海村と韓半島南部との交渉、さらに北部九州の首長層と楽浪の交流が本格化していた(武末 2009)。特に、北部九州では古墳前期の西新町遺跡などから渡来人との密接な交渉の痕跡がよく知られている。このように密接な関係にあったにもかかわらず、①日本列島の半島性鉄製農具の登場時点にこれほどの差があるのはなぜだろうか?②さらに古墳中期のこれら農具セットのうち、原三国時代・三国時代の出土例が 50 点もない U 字形鋤先と曲刃鎌だけが選択的に定着し、変容するのかについての疑問が生じる。さらに半島製鉄製農具のうち、タビとサルポが結局日本列島では定着しないことはさておいても本格的な登場以降、爆発的な発展様相がみられ、日本内での機能的な効率性が証明された U 字形鋤先や曲刃鎌の登場時期が中期であることは、以前から続けられた両国の活発な交渉関係から疑問が残る。

このような時間的な格差は、結局鍛冶関連遺物から明らかになった強力な統制のなかで、鉄器やその製作技術が厳しく管理されていたことを意味する。そして、先述した鍛冶具がもつ階層的な象徴性からみても古墳中期の渡来系の波は以前までの交渉の形態ではなく、鉄器製作技術を厳しく管理できるほどの強力な位階を持つ人を中心にした社会集団全体の移住の結果と考えられる。

以上、述べたような社会集団の移住によるものであれば、中期鉄器生産とそれに伴う鉄製農具がセットで定着せず、選択的に一部だけが定着することについての問題が残る。

古墳時代中期にあらわれる半島系農具のうち、急速度で変容し、安定的に定着するものには、一つの共通点がある。それは古墳中期以前からその技術的な伝統や機能的な連結線上のものという点である。すなわち、蕨手刀子と製作技術的な基盤に基づいて、搬入品である蕨手文のモチーフだけを借用することや、機能的な連結線上にある方形鋤先・直刃鎌のような、既に日本列島内での検証が行われたもののみ、残存することである。

つまり、安定的な定着のためには、古墳中期以前から続けられてきた日本列島の地域性との適合性、技術的進展度という先決条件が必要であったであろう。このような壁を乗り越えなかった鉄製農具は定着せずに退化してしまう。

なお、先述したように古墳時代中期九州をはじめとする日本列島の変化には鉄器製作技術を厳しく統制するほどの最高位クラスの人を中心とした社会集団全体の移住であったことを指摘した。このような一つの社会が移転されたにもかかわらず、鉄製農具が選択的に定着することや鉄器生産・管理体制が正反対の方向に発展することは、当時、韓半島

から渡ってきた渡来系集団の社会的な位置を間接的に示唆する。

一方、多数の先行研究(朴天秀 2001・2002 など)から日韓交渉の様相が金官伽倻(4世紀)-新羅(5世紀前半)-大加耶(5世紀後半)-百濟という流れの中で展開されることを指摘したことがあり、本研究の農工具から検討した九州地域との交渉の様相も従来の先行研究の流れから大きく外れなかった。

しかし、本研究では京都椿井大塚山古墳で出土した異型板状鉄斧は、原形から一部改造したものなのがわかって、その原形は忠州弹琴台土城で出土した鉄鋌と同一な型式であることを確認した。こうした成果は、『日本書紀』「神功紀」46年(366?)条にみられる百濟肖古王が欺摩宿禰の従者である爾波移に鉄鋌40枚を下賜したという一致するために、その関連性の当否が注目される。また、以上の検討を通じて、両遺跡出土品間の編年上も問題ないことを確認できた。

本研究を通じて百濟と倭が土器などの日常品のみならず、遅くとも4世紀初には威勢品を通じたより高度化した交渉がなされており、3世紀代日本の対中国交渉において韓半島をはじめ、より拡大した東アジア的観点の近接が必要なことを力説した。

審査の結果の要旨

1. 本論文の特色

- (1) 李東冠氏は2007年4月から2012年3月までの5年間、福岡大学人文科学研究科史学専攻前期課程および後期課程で考古学を専修し、現在は国立慶州博物館に勤務している。本論文はそうした日本で学んだ方法論と分析技術を駆使した研究の成果であり、これまでの日韓の考古学研究では等閑視されてきた日韓の農工具に焦点を絞り、韓国の初期鉄器時代から原三国時代・三国時代の資料を整理して、日本特に九州の弥生時代・古墳時代の資料と比較検討した点が第一の特色である。
- (2) 具体的な資料の分析では、まず、嶺南地域を対象に初期鉄器・原三国時代の農工具の諸段階を解明して、初現期の月城洞類型(扁平片刃鉄斧、鑄造鉄斧a類、鉄鉈、鉄鑿、鉄剣からなる類型)を設定した点が第二の特色である。さらに、弥生系土器が多数出土して当時の日韓交渉に大きな役割を果たした勒島遺跡にも月城洞類型が存在するとともに、鉄器を生産し、そうした鉄器とその製作技術が九州を中心に日本に流入した点も明らかにされた。
- (3) 次に農具の分析では、これまで日本の考古学研究でほとんど注目して来なかった初期鉄器時代から三国時代のタビとサルポを取り上げた点が第三の特色である。耕起具であるタビは韓半島全体の例を民俗資料とも比較して、錐形、杓子形、嶺南式タビに大別し、

錐形と杓子形はさらに単刃と両刃に細分した。また、嶺南式タビは地面を人が引きずるインゴリ(人挽犁)と考えた。そして、それぞれに該当する鉄鑿や鑄造鉄斧、扇形鉄斧を具体的に上げた。サルポはこれまで知られた柄や袋部が長い①・②形式のほかに、袋部が短い③形式を新たに設定するとともに、②形式では嶺南地域と湖西地域でその形態が異なることを指摘した。そして、そうした成果をもとに、日本の諸例を検討し、出雲における5世紀の新羅系渡来人の存在にまで踏み込んだ。

(4) 鉄器生産に関しては、梯形鑄造鉄斧を鉄製鍛冶具も含めて分析し、弾琴台型鉄鋌にみられる古墳時代前期での百済との交渉を強調する点が第四の特色である。梯形鑄造鉄斧では出現初期での農工具説を肯定しながら、三国時代の開始とともに梯形鑄造鉄斧片を用いた浸炭による製鋼という新たな説を提起した。また、京都府椿井大塚山古墳の出土品中に百済系サルポとともに、弾琴台型鉄鋌を始発とする大型板状鉄斧が存在することを明らかにした。

このほかにU字形鋤先、蕨手刀子、ミニチュア鉄器も含めた具体的な資料の分析結果を踏まえて、農工具にみる日韓交渉では不適合なものは急速に消滅し、最も適合したものだけが存続するが、さらに地域的な特徴に合わせて急速に在地化する傾向があることを指摘した。そして弥生時代から古墳時代の農工具にみる日韓交渉の画期を設定して、古墳時代の始まりに百済地域を含めた鉄素材入手の多角化ができたが、最も大きな画期は従来から指摘されてきた通り、古墳時代中期にあることを認めた。ただし、こうした本格的な半島系の鉄製農工具の搬入変容が始まって安定的に定着する背景に、鉄器製作技術を厳しく管理できるほどの首長層を中心とした社会集団全体移住を考えるとともに、安定的な定着のためには古墳時代中期以前から続けられてきた日本列島の地域性との適合性、技術的進展度という先決条件が必要であったと指摘した。

2. 評価

何よりも課題に取り組む方法論を明示して、キーワードの明確な定義を試みた点が評価される。特に形式と型式の区別は現在の韓国考古学ではあまり意識されておらず、日本考古学を学んだ成果といえる。また、先行研究には十分な注意と敬意は払いつつも、先学の説とは異なる新しい研究成果の導出を試みる努力が随所に認められる点も評価に値する。具体的にはこれまでの入室里遺跡や九政洞遺跡の鉄器組成に先行する月城洞類型の設定、鉄鑿の錐形タビ説の提唱、梯形鑄造鉄斧の浸炭製鋼用素材説、蕨手刀子やミニチュア鉄器の分析と金官加耶産文物の不在を論拠にした沖ノ島祭祀の年代再考論などである。それらは確固とした発掘資料に基づいて論述され、しかも日韓の鉄製農工具を熟知した著者ならではの分析といえる。中でも、京都府椿井大塚山古墳で出た大型板状鉄斧の弾琴台型鉄鋌素材説は本論文の白眉である。三角縁神獣鏡の配布主体とも目されて、通説では百済との対外交渉は不問に付されてきた大型前方後円墳での百済系文物の確認は、大きな衝撃を学

界に与えるものである。もちろん、古墳や沖ノ島の年代問題など、個々の論点の中には異論の余地があり、別の資料での検証が必要な部分も少なくない。こうした点はこれからの検討課題であり、本論文がまだ成長中で、今後伸びる余地があることを示す。また、単なる個別実証で終わるのではなく、時間の経過を加味した古墳出土農具の類型化に見られる法則化への努力も高く評価される。

本論文は著者の日韓におけるこれまでの研究成果を総括しており、独創性もあって、博士論文として十分な水準にある。

7月8日の公聴会での発表は簡潔明瞭で、様々な質問にも的確に回答していた。